

国家主義と核拡散

本稿の提案は、核軍縮は非常に重要であるものの、現行の状況では不可能であり、逆に悪影響を及ぼしうるというジレンマから生まれたものである。国家が互いに競争し、国家間での戦争の可能性が残っている限り、核保有国がその兵器を手放すことはない。

実際に、核軍縮は、例えばロシアと米国といった国々の間で戦争を引き起こしうる。なぜなら、通常戦力で劣る側を守ってきた核の傘がもはや存在しないからである (Waltz 1990)。さらに、核兵器の製造に必要な知識や材料は消えないため、軍縮は永遠に続かないかもしれない。最悪の場合、国家は秘密裏に再核武装する可能性があり、その結果、私たちは依然として核兵器のある世界に生きていくことになる。それは、コミュニケーションの透明性が低く、よってより危険な世界である。

人類が核兵器を信頼できないのであれば、現行の状況下では、おそらく秩序だった軍縮も困難であろう。バートランド・ラッセルが、核戦争の防止には世界連邦が必要だと唱えたことは偶然ではない (Russell 1958/2020)。ラッセルの世界連邦では、核拡散の根本原因である主権国家間の競争が取り除かれる。しかし、米国と中国、イスラエルとイラン、あるいはインドとパキスタンがいかにして一つの連邦の下で結束するのか。この提案は、現行の状況下での軍縮と同様に非現実的である。

だが、これは核兵器のない世界を実現するための唯一の変革かもしれない。これは壮大な計画に聞こえるが、世界的な記憶喪失、あるいは核兵器の材料がすべて失われるといったことが起きない限り、他に選択肢はない。国家間の競争を止めるための数々の提案が失敗を迎えてきた。経済的相互依存は世界大戦を防がなかった。民主主義国家同士の戦争が起きないことは証明済みであるが、民主主義国家と非民主主義国家との間ではまだ戦争が行われている。さらに言えば、民主主義的平和の因果関係には議論の余地があり (Rosato 2003)、仮にそうであったとしても、民主主義国家は崩壊しうるし、実際に崩壊している (Waltz 2000)。

私の提案は、さまざまな分野で主権を保持しつつ、競争を排除する連邦国家への一步を定義するものだ。例えば、国家間の紛争を鎮めるのに十分な強さを持つ国際的な軍隊を結成することである。私は、今日あるいは明日に、そのような連邦を樹立できると主張しているのではない。抜本的な変革には時間がかかる。私が提案しているのは、複雑な展開の一部に過ぎない。

私の提案は、日本が欧州連合（EU）に加盟するべきだというものだ。

急進的なアイデアだが、私たちは急進的な問題に直面しているのではないだろうか？EU は「欧州」連合であって、日本の居場所はない、という言う人がいるかもしれない。しかし、なぜ EU が欧州に限定されなければならないのだろうか？ 国家や国際組織のアイデンティティは常に変化している。今日私たちが当たり前に思っている国家のアイデンティティも作られてきたものだ。同時に、アイデンティティには抵抗力がある。日本が EU に加盟した場合、欧州や日本のアイデンティティが崩れることを危惧する人がいるかもしれないが、それは杞憂に過ぎない。クロアチアが EU に加盟したことで、フランスのアイデンティティは変わっただろうか？ 政治ブロックの拡大によって文化が脅かされることはない。しかし、拡大は連帯の地平を広げる原動力になりうる。

現在、EU は第二次世界大戦中の大陸の経験を中心にアイデンティティを構築している。そこに日本が参加することになれば、新ブロックには、世界の両側から来た人々を結びつける新しい物語が必要になる。本提案の美学はここから展開する：解決策は問題の中にある。簡単に言えば、日本と EU を結びつける物語がある。平和主義と核軍縮へのコミットメントだ。

EU は世界最大の平和主義プロジェクトである。何世紀にもわたる戦争の後、EU は経済的相互依存と民主主義によって大陸の大部分を統合した。EU は、その地の人々が自分自身や他者をどのように見るかを大きく変えた。他の加盟国と戦争をすることは、単にコストが高くなっただけでなく、考えられないほどになった。とはいえ、EU の平和主義は、国家間競争に満ちた世界に存在する限り（ロシアによるウクライナ侵攻を受けて各国の軍事費が増加していることでもそれは明らかである）、変化しうるものである。世界的な変革がなければ、EU は戦争への準備を行わざるを得ない。

世界的な改革への重要な一步は、日本を加盟させることだろう。それは、EU が欧州の枠を超えて拡大できることを示すことになる。加えて、平和主義の規範が世界のモデルとなっている日本を加盟させることで、EU の規範にさらに磨きがかかるかもしれない。結局のところ、フランスは未だに核兵器を持っているのだから。

現在、日本も EU も「パワーポリティクス」が必要な世界に閉じ込められている。これは近い将来も変わらないだろう。グローバルな核軍縮は、数年や数十年で実現するものではない。小さな変化を長期にわたって一貫して行っていく必要がある。

以上論じてきたように、決定的な一歩は、最も先進的な超国家ブロックの力と、影響力の大きい平和主義国の力を統合することである。それぞれの強みを増幅させ、弱点を補うことができる。EUも日本も、民主主義、人権へのコミットメント、平和主義を実践している素晴らしい例である。しかし、彼らの価値観がほとんど当てはまらない世界に阻まれている。両者が力を合わせれば、この状況を変えるプロセスを開始することができる。

これは核軍縮のための大胆なアイデアである。規範的变化の促進に向けてEUと日本の影響力を結合させることは、主権国家体制が内包するジレンマから抜け出す唯一の方法である。EUと日本を、その違いを超えて同じ政治ブロックに位置付けることができれば、両者は平和主義と超国家的ガバナンスへのコミットメントの力を証明することができる。より良い、より安全な世界秩序が可能であることを人々に示すことができるだろう。

参考文献

- Rosato, S. (2003). The Flawed Logic of Democratic Peace Theory. *American Political Science Review*, 97(4), 585–602.
- Russell, B. (1958/2020). Only World Government Can Prevent the War Nobody Can Win. *Bulletin of the Atomic Scientists*, 76(6), 359–362.
- Waltz, K. N. (1990). Nuclear Myths and Political Realities. *American Political Science Review*, 84(3), 731–745.
- Waltz, K. N. (2000). Structural Realism after the Cold War. *International Security*, 25(1), 5–41.